

第 37 話 (21 頁) 飲みくらべ

ひとりのお百姓が、もうひとりのお百姓と水の飲みくらべで、言いあそいをしました。ひとりが言いました。

「海をぜんぶ飲んでみせよう。」

「できるわけがない。」

「飲んでみせる！ かけをしよう！ 海をぜんぶ飲みほすほうに、1000 ルーブルだ！」

「ようし、海を飲んでこい。さもなければ 1000 ルーブルだ！」

すると、ひとりはこちら言いました。

「海を飲みほすと言ったからには、海は飲みほす。だが、川をぜんぶ飲みほすとは言っていない。水が海に流れこまないように、川を大きいのも小さいのも、せき止めてくれ。そうしたら、海を飲みほそう。」

「なんで、こんな荒唐無稽な話をトルストイは作ったのか。子どもたちに何を考えさせようとしたのか。真意が理解できない、というのが、読んだ第一印象だよ。」

「(二人が) 水の飲みくらべで言い争いをしました、と書き出しにあるから、少しずつ水の量を増やして行って、どこまで飲みつくせるか、競い合ったのだろう。そこから、海を全部飲んで見せよう、と話がとんでもなく大きくなったのなら、それはそれとして流れは理解できるけどね。」

「飲みくらべの話題になって一人がそう大言壮語したということではないか。」

「どういう流れだろうと、そもそもあり得ない話に決まっている。酔っ払ってでもいなければ、ここまでは言わないよ。」

「そんなに、なじらなくてもいいよ。この話、もとは、イソップだった。イソップの主人で哲学者のクサントスが、酒に酔った勢いで、全財産を賭けて『海の水を呑み干してみせる』と豪語する。酔いからさめて頭を抱えるクサントスに、イソップは反対に『すべての川の河口を塞いでもらいたい』と相手に難問を突きつけるように知恵を授けたという。」

「窮地に立った主人を頓才で救い出した例として、『イソップ寓話の世界』(中務哲郎、ちくま新書)でも取り上げられていて、不可能事に不可能事をぶつけて賭けを解消してしまったのである、と説明されている。『イソップ伝』の中に出てくるというんだ。」

「酔っ払ったうえでのこと、という推測は当たっていた。」(笑い)

「川は水が海に入ると塩からくなると批判し、海はそれなら入ってくるなど言い返す。そういう話が、川と海、という題で、同じ中務さんの訳した岩波文庫版『イソップ寓話集』(412話)に出ている。これも、少し展開が違うけれど、同じ範疇に入るだろうね。」

「海の水を飲み干すこと、と題して、『イソップ寓話の世界』とそっくりの話がWEBで紹介

介されている。『天草版 伊曾保物語』を底本にした『エソポのハブラス 原文と翻刻』の一話として、だ。中務さんの『イソップ伝』の出典と同じだね。」

「うーん、いろいろと分かってくるものだなあ。イソップがもとになっていることが確認できたということで、アーズブカに話を戻そうよ。」

「登場人物は、ひとりのお百姓、もうひとりのお百姓、の二人。設定も表現も、イソップよりずっと簡略化されている。」

「しかも、前置きの後で出てくるのは『ひとり』だけだよ。『もうひとり』は会話から類推できるでしょ、ということか。」

「その会話、二人のやりとりが、実にテンポが良くて歯切れがいい。声に出して読んでみると、よく分かるよ。」

「それにしても、この話から子どもたちに何を汲み取ってほしいと思ったのだろうか。」

「つまらないことで意地を張り合うものじゃない、というんじや、平凡すぎるし…」

「男の人って、どうしてこうなんだろうか、と女の目には映るかな。」

「もうひとは、どう反論したのか、と子どもたちに質問してみたらどうだろう。」

「だれも反論なんかできっこないよ、ここまで話が進んだ後では。」

「飲み干すと言ったんだから、自分で川をせき止めて飲め、と、最初にそう注文すれば、こんな風にへこまされる展開にはならなかった。反論が成り立つなら、これしかない。」

「水の飲み比べにこだわるようだけど、2007年に米国のカリフォルニア州でトイレへ行かずに飲む水の量を競うコンテストがあり、約8リットル飲んで2位になった28歳の女性が帰宅後に水中毒で亡くなったという。やっぱり、海の水を飲み干すなんて、現実離れしているという思いは消えないなあ。」

「知恵比べ、あるいは、言葉遊びと単純にとらえればいいのではないか。」

「最初に読んだとき、シェークスピアの『ヴェニスの商人』を連想しちゃった。金貸しのシャイロックは肉1ポンドを切り取るという証文を盾にしたが、血は流してはならないと逆に釘を刺されて窮地に立つ。そっくりの話だ。」

「トルストイのシェークスピア嫌いは有名で、誠実さなど芸術の3条件を備えていないと酷評していた。とすれば、『ヴェニスの商人』とそっくり、とは思われなくなかったか。」

「一休さんのとんち話の『屏風の虎』とも共通するよ。屏風に描かれた虎が抜け出してきては悪さをするので縛り上げてほしいと殿さまから頼まれ、一休さんは縄を手に持ち、『どうぞ虎を屏風から追い出して下さい』と投げ返す。この話も、やっぱり一緒だよ。」

「そういう類のとんち話は、いろんな国にありそうだ、ということで締めくくろう。」